

丁子紅子

JOSHIBI no.198



絵画は「引き算」。 観る人が入り込める余白を。

美人画を中心として

数多くの作品を発表しながら

アパレルブランドや小説、CDなど

さまざまなプロダクトとのコラボレーションも

果たしてきた日本画家・丁子紅子さん。

透明感のある筆致には、

女子美での学びが息づいていると語ります。

画家である叔父の影響で、小さい頃から個展に行くのが日常でした。遊び道具といえば筆や絵の具といった画材です。お絵描きをするのと褒められるのが嬉しくてまた描く。そうやって、毎日のように絵を描いていた記憶があります。芸術の道に進もうと決めたのは中学の頃です。近所の高校に絵画専門のコースがあると知り、進学することになりました。叔父が画家なら父は板前。自営業ばかりの家系で育ったからか、私のユニークな進路選択を家族はなんら気にすることなく応援してくれました。高校1年の頃はさまざまな分野に触れ、2年次には日本画に絞ります。祖父が掛け軸や日本刀を扱う骨董屋を営んでいたこともあり、日本の伝統工芸にはなじみがあったのです。大学でも日本画を学び続けたいと思うようになりました。

女子美に進学するきっかけとなったのはオープンキャンパスです。その頃は日本画だけでなく手描友禅にも興味がありました。日本画を担当されていた岸野香先生に相談すると「日本画で身につけた技術は友禅を含め幅広く活かせるよ」とのこと。ここでも、日本画とテキスタイル、どちらの道も開ける。そう考えて



丁子紅子（ちょうじ・べにこ）

日本画家。女子美術大学絵画学科日本画専攻卒業。卒業後はジュエリー会社で勤務する傍ら美人画を描き続け、2015年に独立。2019年現代童画大賞受賞。現在、現代童画会委員。都内の百貨店やギャラリーを中心に、日本画の作品を多数発表する。本の装画、CDジャケットのアートワーク、アパレルや眼鏡ブランドとのコラボレーションも手掛ける。最近の主な作品展として「丁子紅子個展『憧憬』そごう大宮・そごう広島」（2023年）、「丁子紅子×Beniko Choji / SASAI FINE ARTS」（2022年）など。

入学を決めるに至ります。女子大ならではの安心感や落ち着いたキャンパスの雰囲気にも惹かれました。

女子美での4年間を一言で表現するなら、私の基盤を築いてくれた時間です。印象に残っているのは、絵の具を作る授業。日本画の絵の具は石から作られますが、この工程を体験したのです。石を拾い集めて機械で粉砕し、ふるいにかけてまた細かく砕くことを繰り返ししていきます。一から手間ひまかけて画材を作る過程を肌で知ってからは「絵の具を無駄にしないといけない」と、1本の線さえも今まで以上にいいねいに描くようになりました。

自分の好みに関わらず、制作課題を通じてさまざまな題材に向き合えたことも貴重な経験でした。あまりなじみがない対象も授業では描きます。その過程では自分の得意なことや好きなことが浮き彫りになるものです。これもまた大学で美術を学ぶ意義かもしれません。自分が好きな対象ばかりを描いているのでは、趣味と変わりませんから。とはいえ私が提出する作品は変化球ばかりでした。魚の課題が出されれば古代魚を、風景画ならすぐそばのドラム缶を描くといった始末。先生方は、そんな私をあたた

かく見守ってくださいました。学生の自由な目線を大切にしてくれる大らかさやまた、女子美の良さだと思います。

大学時代は私にとって模索の時代でもありました。大学の課題では具象を描く機会が多かったこともあり、自主的に抽象画を描いていたのです。当時の関心事は「心が目の前に現れたとしたら、どんな姿をしているのか」で、でき上がるのは暗い絵ばかり。観る人に響く作品とは程遠いものでした。率直に言って「絵を通じて感情を吐き出している」だけだったものの、描き続けるうちに「心」のモチーフが徐々に見えてきます。人間の心を描くからには、人物画がふさわしいだろう。描き手である自分は女性だから、女の人を描くのが一番偽りなく心を表現できるのではないか。そうやってたどり着いたのが、今でも描き続けている美人画でした。

もうひとつ、鮮明に覚えていることがあります。それは卒業制作において、女の人が月を背負っている絵を描いたときのことです。はじめは女性の傍らに小ささまざまな抜け殻のようなものを散りばめていました。すると私の作品を目にした先生が「本当に描きたいものだけを描き、ほかは削ぎ落としなさい」と助言をくださったのです。絵を描くと

いう行為は往々にして、色や形を加えていく「足し算」になりがちです。ところが、余計な情報を削っていく「引き算」もまた意識すべきなのだと。この教えは、今でも肝に銘じています。

在学中には自分の作品がまったく目の目を見なかったため、「絵だけで生計を立てていくのは難しいだろう」と、作家への道をいったん断念。オーダーメイドジュエリーの会社で働く傍ら、副業として描き続けることにしました。お客さんからのオーダーに耳を傾け、ジュエリーをデザインしていると「相手が求めているものを表現してはどうか」と思うようになっていったのです。大学の頃にはなかった発想です。在学中には次々と展覧会の誘いがかかる同級生たちを見て、「自分の作品には何が足りないんだろう」と落ち込むこともありましたが、今振り返ると胸に落ちます。自分が表現したいものと、観る人が求めるものがびたりと合ってこそ「作品」と呼べる。そう思い至ってからは、作風も変わり始めました。以前は黒い背景の絵ばかりでしたが、思い切って白に変えたのです。透き通った白い肌、黒髪、そして生きていることの証として唇に赤を少しだけ。この3色を基本として、できるだけシンプルに。





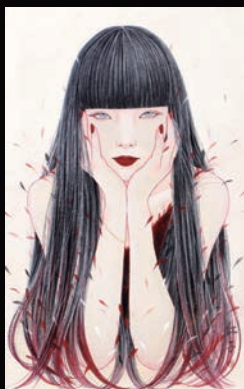
「このままの眠りを。」2022 綿布に岩絵具／F6



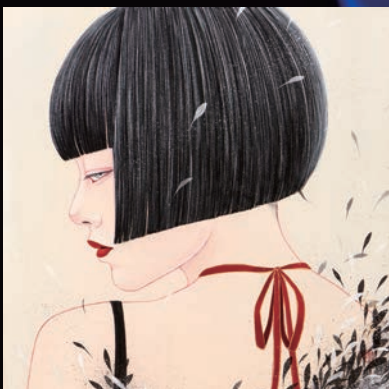
「息合い。」2023 綿布に岩絵具／P15



「居場所。」2022
綿布に岩絵具／F6



「うちがわ。」2022
綿布に岩絵具／M10



「私の事。」2022
綿布に岩絵具／S4



すると、観る人がその絵を解釈する余白が生まれます。悲しいときに眺めたら、どこか物悲しげに見える。嬉しいときに眺めたら微笑んでいるようにも見える。絵画そのものの要素が少ないからこそ、観る人が入り込める。私が表現したかった作風が、ようやく見えてきた時期でした。作品づくりにおいて「絵に語らせすぎない」ことがいかに大切か。ジュエリー会社での接客経験を通じて、このことをいっそう実感するようになっていったのです。

この作風が世に受け入れられたのは、作品展「見参」です。これは、作家を志す若手の登竜門といわれる大規模展示。同じく出展を予定していた女子美の卒業生が声をかけてくれました。この展示が反響を呼び、後日開催された初めての個展では私の作品の前に列をなす人々を目の当たりにします。折しも美人画ブームが追い風となり、大人気を博しました。「自分の絵も人に買ってもらえるものなんだ」という手応えを初めて得たのがこのときです。近い将来作家として独立することを意識するに至った出来事でした。

ちょうど同じ年に、もうひとつの転機が訪れます。画集『美人画づくし』に、作品を載せていただいたのです。画集を目にした異業種の方々からお誘いを受けるようになりました。メタルコアバンドの a crowd of rebellion のCDジャケットやアパレルブランド「0658」の洋服のアートワーク、桐野夏生氏の小説の装画など、さまざまなコラボレーションへと発展していきます。こつこつと続けていたSNSでの作品投稿も呼び水となりました。

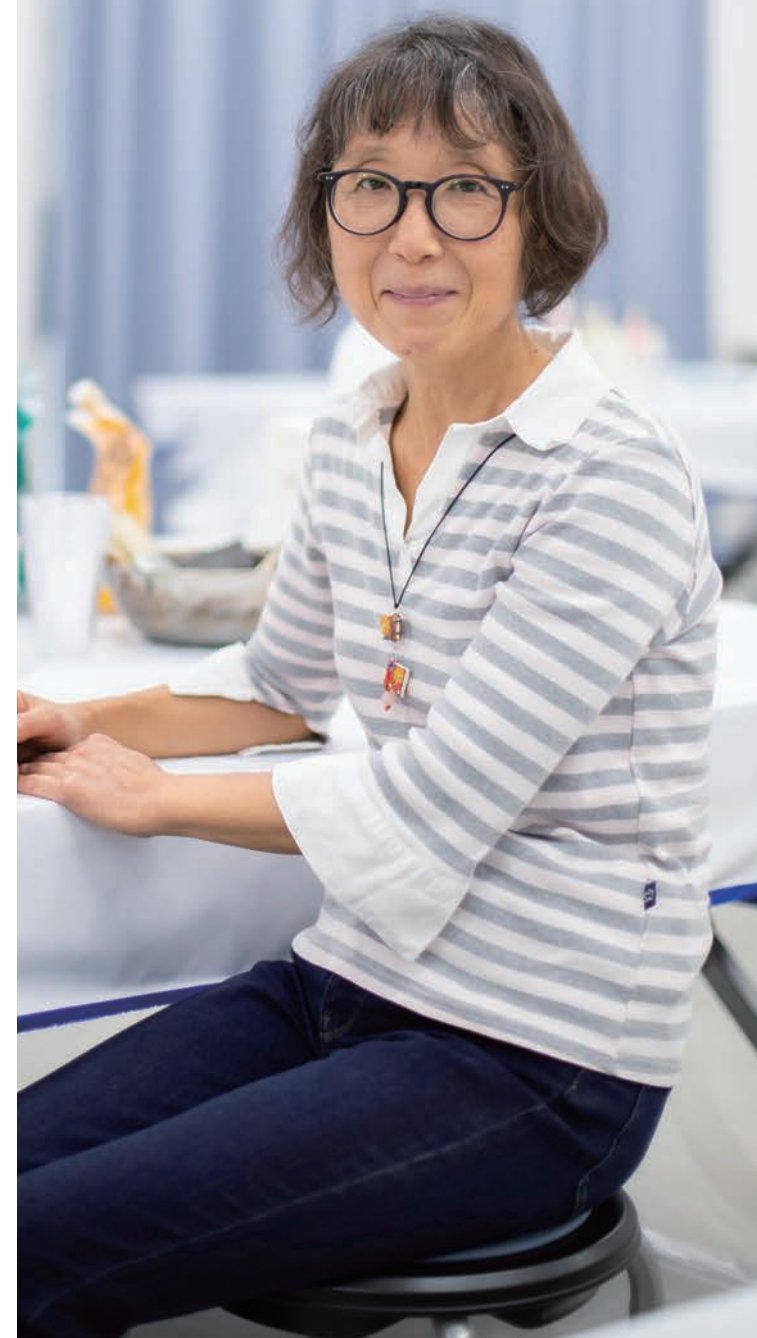
現在の私のモチベーションは、「アートをもっと身近な存在にしていきたい」という思いです。異業種とのコラボレーションはその絶好のチャンス。アートギャラリーになじみがない方にも、気軽に作品に親しんでいただくきっかけになります。同時に忘れたくないのは、あくまで私の軸足は作品展にあるということ。さまざまなグッズを通じて絵画に興味を持ったお客さんが、作品展にも足を運んでくださる。この流れがもっと広がってほしいのです。日本画家としては、日本画の価値を発信していくことも目標のひとつ。およそなんでもコンピュータで創作できる現代だからこそ、このアナログな芸術の素晴らしさをもっと伝えていきたい。天然の鉱物の美しさを余すことなく活かせる芸術は、ほかにありません。私が女子美で経験したように、多くの人に日本画の魅力を知ってもらえたら嬉しいですね。

1000年後も作品を生かし続ける。
それが私の人生をかけたミッション。

近藤 佳子

大切な芸術作品や書籍の価値を
損なわずに傷や汚れを直し、
後世に残していく修復家。
近藤佳子さんは、イタリアで
約25年間修復に携わってきました。
修復家としてのキャリア、
その軌跡について語っていただきます。

近藤佳子（こんどう・よしこ）
紙資料修復家。1987年女子美術大
学絵画科日本画専攻卒業。主な実績とし
て、2008年よりドイツ美術史研究所
図書館の希少本コレクション、2020年
よりウフィツィ美術館付属図書館の18、
19世紀の希少アルバム・手書き希少本の修
復に携わったほか、2023年にはコン
ハーゲン国際マニスクリプト保存修復学
会にて成果発表も行う。現在は修復だけ
でなく紙を使った創作活動も行い、和紙
をはじめとした日本の工芸をイタリアで
紹介することに力を入れる。



Text 株式会社フリッジ Photo 渡辺一城

手に職を持ち、自立した人生を歩みたい

1987 - 1996

——女子美術大学を卒業後、どの
ような活動をされていましたか。

かねてから「何か手に職をつけて
自立したい」という思いがありま
した。当時は男女雇用機会均等
法が制定されていたとはいえ、大
学を卒業した女性でさえキャリア
を築くことがまだ難しかった時代
です。日本で浸透していない特殊
な技術を海外で身につければ、そ
の分野のエキスパートとして活躍
できるのではないか。そう考えて、
アルバイトで資金を貯め、イタリ
アのフィレンツェに渡りました。

——学びの地としてフィレンツェを
選んだのはなぜでしょう。

芸術の宝庫だからです。女子美に
いた頃、美術史の先生の引率で
ヨーロッパ各地の美術館を訪れま
したが、そのときに目にしたフィレ
ンツェの街並みの美しさが忘れら



——そのフィレンツェで、修復家を
目指し始めたとは伺いました。

はい。最初の2年間はアカデミ
ア美術学院絵画科で洋画を学
んでいたのですが、「もっとニッ
チな領域の職業訓練を受けたい」
と思ったことが修復家を志し
たきっかけです。実際、フィレン

ツェは修復技術を学ぶのにつ
てつづの地でした。1966年
に発生した大洪水で多くの書籍
や芸術作品が甚大な被害を受
けた際、各国から修復の専門家
たちが集まり、大規模な修復セ
ンターが建設され、最先端の修
復技術が持ち込まれたのです。
ちょうど修復家の養成所である
パラッツォ・スピネリで生徒を
募集しているとの情報を聞きつ
け、紙資料修復コースへの入学を
決めます。ここではメスの持ち方
や本の縫い方といった基本的な
技法をひととおり身につけただ
けでなく、一切の妥協をせずに修
復に向き合う専門家たちのプロ
意識にも触れました。卒業後は
晴れてトスカナ州公認の修復
技術者の資格を取得。イタリア
文化庁から文化財保存修復士
の認証も受けました。名実とも
に、修復家としてのキャリアがス
タートすることになります。

パラッツォ・スピネリの授業での練習作品



版画 修復後

版画 修復前



パラッツォ・スピネリで先生やクラスメートたちとともに

2004 - 2016

新たな
修復技術の
研究に挑む

前川工房の前川ルアーナさんと

日本の和紙を用いて
修復中の文献のコレクション

前川工房の外観

—— 独立されてからは、どのように活動してきましたか。

独立後は修復家の共同工房である前川工房に移りました。そこで紙、絵画、彫刻、テキスタイル修復に携わる人々と出会えたことは幸運でした。彼らから刺激をもらいましたし、独立後もコンスタントに修復の依頼をいただける人脈を得られました。

この頃の主な活動は、フィレンツェにある美術史の研究施設「ドイツ美術史研究所」での修復でした。なかでも鮮明に覚えているのが、前川工房を営む前川ルアーナさんとともに、インクで手書きされた文献のコレクションの修復に取り組んだこと。コレクションには傷などの物理的な劣化だけでなく、インクの腐敗をはじめとする化学的な劣化も認められました。そこで、インクの変質を防ぐ方法についての研究も実施。その結果をコペンハーゲンで催された修復に関する国際的な学会で発表しました。個別の修復依頼に応えるだけでなく、修復技術そのものをアップデイトしていく研究活動に関わったことで、修復技術の向上に貢献できる研究の面白みを感じました。

1997- 2003

紙資料から写真へ。修復の道を広げ、深める

—— 修復家の資格を取得した後は、どのような活動をされたのですか。

しばらくは実務経験を積むべくさまざまな修復工房でのインターンシップに参加していました。次第に「紙資料だけでなく、他の対象の修復技術も身につけたい」を思うようになります。そこで着目したのは、当時はまだ黎明期にあった写真修復の分野。アリナリー写真美術館でその技術を学べると知り、門をたたきました。当時の写真修復の先進国といえばコダック社があったアメリカですが、そのコ

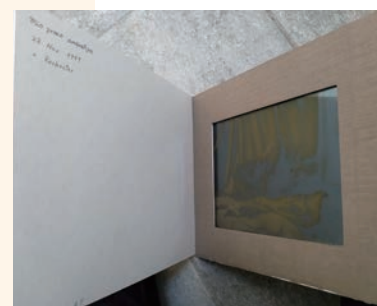
アリナリー写真美術館にて

アリナリーの古典写真技術ワークショップで
使われた暗箱古典カメラ

ダック社の創業者の家であり、現在は世界最古の写真分野の博物館となっているジョージ・イーストマンハウスのコンサベーションセンター長が来館して教鞭を執ってくださいったことも。近代的な写真の修復技法を学べました。

—— 修復家としてフィールドを広げていったわけですね。

はい。さらにアリナリーからの派遣制度を使って渡米し、ジョージ・イーストマンハウスにも赴きました。そこで1カ月間、写

ジョージ・イーストマンハウスでの研修中に、
古典撮影・現像技術のひとつ
「アンプロタイプ」によって作った写真

真修復を学びます。MoMAやメトロポリタン美術館など、有名な美術館の修復工房を訪れ、最先端の修復技術を目にするのができたのは貴重な経験でした。この時期に、修復家として自立するための土台が完成したように思います。目の前の作品を、自分の仕事を通じて後世に残していきたい。そんな使命感が芽生え始めた時期でもあります。ジョージ・イーストマンハウスでのインターンシップを終えると、再びアリナリーに戻りますが、出産を機に「時間を自分でコントロールしながら仕事をしていきたい」と、2004年に独立しました。



2017- 2020

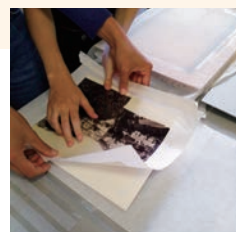
自分の技術を、
次の世代に伝えていきたい

—— 2018年からは、ボローニアカデミア美術学院で2年間教鞭を執っていらっしゃいます。自ら修復するだけでなく、「教える」という活動にも力を入れ始めた背景には、どのような心境の変化があったのでしょうか。

きっかけとなったのは、2017年に乳がんの手術を受けたこと。イタリア語の「悪性腫瘍です」という宣告は今でも覚えています。寿命はあとどれくらいだろうか。3年も生きられれば幸運かもしれない。そう考えていると、当たり前のように続くと思っていた人生が、有限であることを痛感します。同時に、自分が持っている技術を伝えていきたいという思いが芽生えました。自分がいなくなっても、次の世代の人々によって技術が受け継がれてほしい。まさにヒポクラテスの格言の通り「芸術は長く人生は短し」ですね。ボローニアカデミア美術学院で教鞭を執るようになったのはそんな理由からです。私が教えていたのは、主に写真の修復です。教える立場として万全の準備をするべく、基礎基本に立ち返って教科書を読み漁る日々。1日の授業のために5日間ほどを費やして資料作りをするのも日常茶飯事でした。自分が作業をするのと、他人に教えるのでは、必要となる理解の深さもまるで違いますからね。それでも「この技術を次世代に分け与えていきたい」と思いながら準備するのは充実感がありましたし、優秀な学生たちと過ごす時間は刺激的でした。



ボローニアカデミア美術学院の校舎内・授業の様子

ボローニアカデミア美術学院での
修復作業の様子

近藤さんが女子美でワークショップを開催 「ペストペーパーで創作の楽しさを感じてほしい」

女子美術大学の卒業生を中心に、社会で活躍する女性アーティストたちを招いて行われる大学主催のワークショップ。2023年8月、学生たちが熱心に耳を傾ける先には、近藤佳子さんの姿がありました。今回のテーマは「ペストペーパー」。元々はヨーロッパで生まれた紙の装飾技法のひとつで、絵の具を混ぜ込んだ糊で紙に模様をつけていくものです。日本ではあまり浸透していませんが、欧米では本の表紙や見返しなどに使われてきました。「特別な道具が要らないと



ころがペストペーパーの魅力。ハケ、糊、絵の具があればできますし、ハケの代わりにフォークやヘラを使うこともできます」と近藤さんは話します。基本的な手順のガイダンスが終わると、いよいよ実際に手を動かしてペストペーパー作りへ。学生たちは好みの色の絵の具を糊と混ぜ合わせて、紙の上に思い思いの模様を描いていきます。「手本は示しますが、その通りに描く必要はありません。むしろ大切なのは、型にはまらないこと。自由な発想で描いてみることで」と



語る近藤さん。学生たちの楽しそうな姿に「創作は、自分を表現することでもあります。創作の楽しさを再認識してもらえたら、このワークショップの目標は達成です」と頬を緩ませます。女子美術大学では今回のワークショップにとどまらず、さまざまなフィールドで活躍する女性アーティストと学生との交流イベントを定期的開催。「芸術による女性の自立」という建学の精神に則り、学生たちに多様なロールモデルを提供し続けてきました。ワークショップで出会う女性アーティストたちの活躍が、自身の学びと地続きであることを肌で感じてもらう場になっています。



海外で活躍する女子美生たち 特別編



コンペンティーノの中庭での展示会



折り紙を使ったモビール



コンペンティーノの外観

そのとおりです。一方で、修復の仕事は私にとっていわば「人生をかけたミッション」。今でも修復の依頼が来ると、背筋が伸びる思いがします。貴重な文化財を100年後、1000年後に残していく。その重責を

——コロナ禍という逆境でしたが、新たな方向に足を踏み出せたのですね。

コンペンティーノでは、イタリアのほかドイツやトルコなど各地から集まった職人やアーティストたちとの交流を通じて多くの刺激を受けました。この時期の大きな変化としては、入居者たちに影響されて修復だけでなく創作活動も始めたこと。折り紙を使った小物作りやデコレーションペーパーを使った制作を始めました。現在は修復と創作、半々くらいで活動しています。

頃から。家賃も比較的安いので、コロナ禍で収入の目処が立たなかった当時の私には願ってもない幸運でした。



担っているわけですから。

——修復家として大切にされていることはなんですか。

身につけた技法を機械的に用いるのではなく、個々の作品の状態をよく観察することです。作品も人と同じ。「この人の寿命を伸ばしてあげたい」と思いながら修復に向き合っています。患者さんによって症状や治療法が異なるように、作品も状態や適した修復方法は異なるものです。現代の技術ではまだ直せなくても、日々進化している修復技術によって、将来的には直せるかもしれません。「次の世代に修復できるよう、状態を保存する、劣化を遅らせる」という意識も大切です。

——海外で芸術に携わる意義とはなんでしょう。

異国の文化に触れ、視野が広がることです。芸術の国イタリアには、国内だけでなく世界中からアーティストたちが集まっています。彼らから受ける刺激はかけがえのない財産です。それと同時に、日本文化の素晴らしさを再認識できたのも大きな収穫でした。日本の職人が作るハケや筆の品質はとても優れていますし、繊維の長い和紙は修復の際にも重宝します。だからこそ、海外で活動したいなら、日本文化についてよく知っておくこともとても大切です。海外の方々は、日本

文化にとっても関心がありますから。

——海外での活動を志す学生にとって貴重なアドバイスですね。

もうひとつ、アドバイスできることがあるとすれば、最初から自分の選択肢を絞りすぎないことです。私自身、「絶対にイタリアで

活動していきたい」と心に決めていたわけではありません。元々は海外で技能を身につけて日本で活躍したいと考えていたほどです。でもイタリアでさまざまな出会いに恵まれ、仕事がつながっていったことで、結果的に30年以上住むことになりました。多様な選択肢に目を向けてみることで、可能性が自ずと開けてくるはずですよ。

企業で働く、 そんな未来。

Vol.04



仕事を志すようになりました。ではどんな分野で？ そのヒントになったのが、2年生の時に受けた粘土作品（頭像）を作る授業でした。そこで感じた「立体って楽しい！」という思いから、ゲーム系の3Dモデリングの仕事が選択肢に。ゲームそのものも、小さい頃から好きでしたので。その後、学内で行われる企業説明会にいくつか参加するうちに心が固まっていきました。今働いている1-UPスタジオを知ったのも、学内説明会がきっかけです。任天堂のゲームを手がけているのはもちろんですが、楽しそうな社内様子が伝わってきて惹かれました。

好きなことを尊重してもらえ環境で

とはいえ、入社時点ではモデリング用のツールはほぼ触ったことがなく、入社後の新人研修で基礎から応用まで身につけていきました。技術の習得のみに集中できる環境で、先輩方が優しく丁寧に教えてくださり、本当にありがたく貴重な時間だったと感じています。日本画とゲームとは作り方はまったく違いますが、私が植物好きであることを尊重してくださり、大好きな植物系のモデルをよく担当させていただいています。日本画専攻で学んできた繊細な色使いなどをうまく生かして制作し

多くの人が憧れる任天堂のゲーム開発の現場でも、女子美卒の先輩たちが活躍しています！今回は、日本画専攻を卒業後、「1-UPスタジオ」でデザイナーとして活躍されているおふたりに、大学時代のこと、そして貴重なお仕事のことなどを伺いました。

1-UPスタジオ株式会社

任天堂の100%子会社として2000年に設立され、3Dの「スーパーマリオ」シリーズや『あつまれ どうぶつの森』『リングフィット アドベンチャー』など、大人気ゲームの開発協力を担う。
<https://1-up-studio.jp/>

『スーパーマリオ オデッセイ』©2017 Nintendo
担当箇所：デザイン、レベルデザイン、CGツールプログラム、サウンドの一部
発売元：任天堂株式会社



空気感が心地いい会社

就職活動では「ものづくりができる会社」を軸に志望先を探していくなかで、自然とゲーム業界に選択肢が絞れていきました。兄がいることもあり、子どもの頃から家にたくさんゲームがある環境で育ってきました。ファミコン、プレステ、ドリームキャスト……ほぼどんなゲーム機もあるくらいの家で（笑）。もちろん私もゲームが好きでしたし、ものづくりをするなら自分が好きな分野がいいなと思ってたのです。何社か行きたい会社がありました。なかでも「1-UPスタジオ」は老若男女に遊ばれている任天堂のゲーム開発に関われることが大きな魅力。また学内説明会の時に、作りかけだったボー

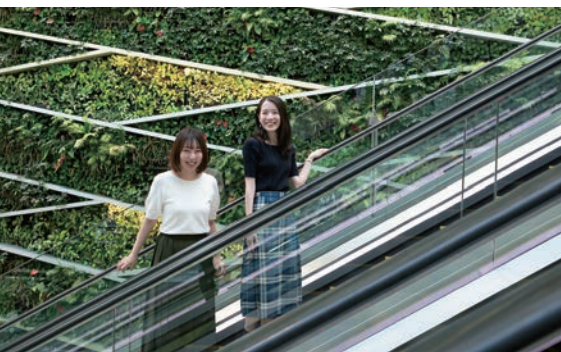
高屋 緑さん



芸術学部 美術学科
日本画専攻 2015年3月卒業
制作部 地形デザイナー

我が家のようなアトリエで 過ごした楽しい時間

岩絵具の色や質感が好きで、自分で岩絵具を作れることにも惹かれて女子美の日本画専攻へ。大学時代はとにかく楽しかったですね。日本画のアトリエ内が我が家のような気持ちで、同じ専攻の友達とわいわい話しながら絵を描く。そんな日々を楽しんでいました。



児玉わか奈さん



芸術学部 美術学科
日本画専攻 2018年3月卒業
制作部 地形デザイナー

「植物」を描き続けた4年間

予備校時代、日本画の課題で花をモチーフに描くことが多く、花の名前を覚えてスケッチをしていくうちに、花や葉っぱの形や色合いに心惹かれていきました。大学に入ってから、自分で自由に制作できる時には、ほとんど植物を描いていました。ノウゼンカズラや葛などの蔓性の植物が特に好きで、よく描いていましたね。

3Dモデリングに興味を 持ったのは粘土の授業がきっかけ

就職に意識を向け始めたのは、3年生の後半あたりです。そのまま日本画を続けていくか就職するか迷った時期もありましたが、いろいろなガイダンスを受けていくうちにものづくりができる

トフォリオを見て快くアドバイスをくださったたり、「1-UPスタジオが関わったゲームと一緒に遊ばせてもらったりもして、空気感がとても心地よかったことも、興味を持った理由の一つです。

どこか女子美と似ている 穏やかな環境

「1-UPスタジオでは、児玉と同じ地形デザイナーとして、地形モデルの制作を担当しています。地形モデルというのは、基本的にはキャラクターが歩く地面全般のこと。そこには背景の建物や小物、木なども含まれており、キャラクター以外のほぼ全部といった感じですね。アート・デザインについても、当社では新人でもチャンスがあれば関われる環境があり、すぐやりがいがある職場だと感じています。また、職場全体で穏やかな雰囲気の人が多く、困った時は自然と助け合えるのもいいところ。仕事としてのスピード感や達成感、どこことなく、女子美と似たような雰囲気があるなど個人的には感じています。そこに男子が加わった……みたいな感じでしょうか（笑）。ものづくりをしたいという思いで就職をし、実際にものづくりの楽しさを実感しながら仕事ができていることは、とても幸せです。世界中の人々の反応を楽しみのひとつに、これからも多くの商品に携わっていきたくです。

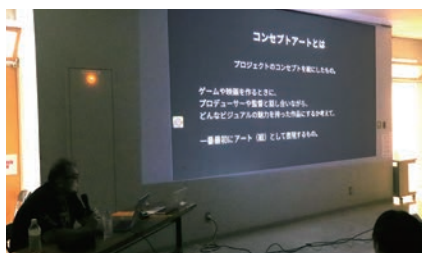
⑤

ハイブリッド
ドローイング演習株式会社INEI 特別講演会
「トップアーティストの
しくじり人生」

9月27日に株式会社INEI・株式会社ワコムとの協力のもと、コンセプトアーティストの第一人者である株式会社INEI代表取締役の富安健一郎さんによる特別講演会が開催されました。



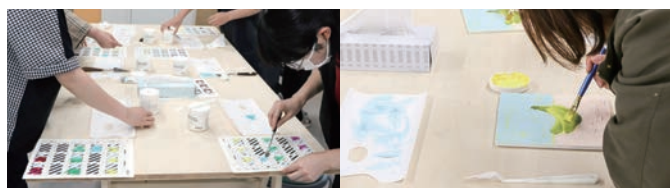
「実写版キングダムシリーズ」「ファイナルファンタジー 11」などを代表作に持つ富安さんは、ゲームや映画だけでなく、都市開発、プロダクト開発などにもコンセプトアートを提供し続けています。講演会では、実際に制作されたコンセプトアートについて、Photoshopのレイヤー 1つ1つを見せながら、貴重な制作の過程を解説いただきました。また、コンセプトアートという概念が存在しなかった時代に、どのようにして仕事として活躍されるに至ったのか、ご自身の失敗を含めた経験談をお話いただきました。新たな職業を切り開いた富安さんからは、「人生なんて何が正しいのか分からないので、今何がやりたいか分からない人も恐れずにたくさん間違いをして経験を積んでほしい」というお話があり、最後の質疑応答では、予定時間を過ぎても質問が止まず、参加した60名あまりの学生たちは、多くの刺激を受けました。



③

ハイブリッドドローイング演習
『ゴールデンアクリリック講習会 メディウム編』

7月6日にホルベイン画材株式会社の協力のもと行われた、『ゴールデンアクリリック講習会 メディウム編』では、同社Golden Artist Colors, Inc.の製品に携わっている社員の方を講師に迎えて、絵の具に様々な効果を加えるメディウムの特徴や使い方について学びました。演習の前半では、硬さや艶感が異なる3つのメディウムを使用し、質感の見本を作成。筆に取ったとき、それぞれの乾いたときに出る表情の違いを楽しみながら学び、後半では、モノクロコピーの画像を使用してメディウムを実践するワークショップを行いました。前半で学んだ異なるメディウムを活かして、実物の雰囲気近くに近づける練習をしました。また、ゴールデン学生サポーター制度も始まり、アートシーンで活躍する学生の機会を創出しています。様々なメディウムに実際に触れることで、学生たちの制作の幅をより広げる貴重な機会となりました。



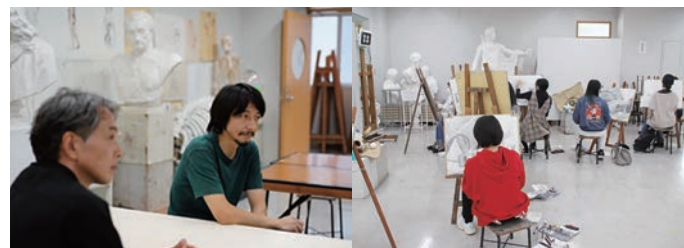
④

ハイブリッドドローイング演習
『～紙やキャンバスに向かい合う前に、
知っておきたい描画材料のこと～』

9月21日と10月5日の2回にわたり、協力のホルベイン画材株式会社より平松博彦さんを講師に迎えて、描画材料について改めて学ぶ講演会が行われました。1回目の講義は『絵具概説』。絵を描くために当たり前のように使っている絵具について、種類やその特徴といった基本的なことから、「なぜ絵具は乾くのか」といった知ってそうで知らないことから、「使っている絵具で色を作る方法」まで、なかなか知ることのできないテクニックなどをわかりやすく解説していただきました。その後は、水彩絵具を使って混色をするワークショップも行いました。2回目の講義は『顔料を中心とした色材展開』。1回目の講義で習った絵具の特性や知識を基に、実際に顔料と糊を混ぜ合わせて絵具を作り出す実践的なワークショップを行いました。普段授業で使用するようなアクリル絵具や油絵具のみならず、フレスコやテンペラといった古典的なものまで、全6種類の絵具を自分で作ることで、身近であった絵具についてより知識を深める機会となりました。



①

2023年4月入学対象
『入学前デッサン講座』

本学では、入学までの期間をより有意義に過ごしていただくために、総合型選抜・学校推薦型選抜（指定校制）の合格者を対象に、「入学前デッサン講座」を3日間で開催しています。この講座では、イーゼルの使い方、構図の取り方、エスキースの仕方、鉛筆の削り方や使い方など、デッサンの基礎を学びます。3日かけて「卓上構成デッサン」または「静物デッサン」を1枚仕上げ、講評会を行います。受講生は入学前から観察力や描写力が向上します。講座では、デッサンの技術だけでなく、入学後に学生が利用できるドローイングセンターという施設についても紹介します。また、講師と学生が自己紹介を通じて交流し、専攻を横断したコミュニケーションが生まれる場でもあります。

②

ハイブリッドドローイング演習
『プロイラストレーターの世界』

6月22日、プロジェクト運用・イラストレーション・映像・WEB制作を通して、人々に「ワクワクとドキドキ」のエンターテインメントを提供する株式会社boxと、イラストレーターでモバイルゲーム『バンドリ！ ガールズバンドパーティ！』の運営に携わっている信澤収さんによる特別講演会が開催されました。講演とワークショップの2部構成で行われました。前半の講演会では、株式会社box代表の大森さんと信澤さんの2人から、「プロとは何か」「プロのイラストレーターに求められている力」などの仕事のことから、在学中にやっておくべきことなどを学生に向けてお話をいただきました。後半のワークショップでは、学生たちが事前に制作したオリジナルのイラストを信澤さんらプロのイラストレーターに添削してもらい、今後の制作に向けてのアドバイスをもらう機会をいただきました。憧れの信澤さんを前に、終始熱心に聴講している姿が印象的な特別講演会となりました。

女子美術大学では、『描く行為』に特化した専門的な技術と知識を多角的に研究し、実践的に社会に還元するための施設として相模原キャンパスにドローイング

センターを設置しています。本センターでは、授業の空き時間や放課後の時間を使って、自由にデッサン力を鍛えることができるほか、モデルのクロッキー会や企

業講師を招いてのハイブリッドドローイング演習も企画しています。ここでは、2023年度のドローイングセンターの取り組みをピックアップしてご紹介します。

ドローイングセンターの取り組み

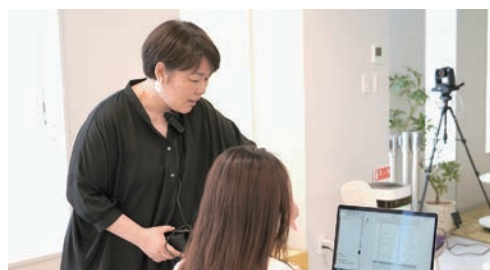
ドローイングセンター
WEBサイト

共創デザイン学科

レジリエンスキャリアアッププログラム®

共創デザイン学科は、自身の強みとなるスキル教育に加え、折れない心やキャリアを高めるための教育にも力をいれています。学生のみならず、すでに社会で荒波に揉まれながら頑張る全ての女性たちを支援したいと考え、社会人女性のための短期間プログラム『レジリエンスキャリアアッププログラム®』夏期講座を実施しました。

スキルアップ講座



ユーザーインターフェース講座

東芝テック株式会社の大熊裕美子先生によるユーザーインターフェース講座では、飲食店オーダーアプリのプロトタイプを、AdobeXDを使って制作しました。多くの受講者がXD初心者でしたが、プレゼンではそれぞれオリジナリティあふれるUIを完成させていました。

スキルアップ講座



グラフィックレコーディング講座

株式会社 東芝の澤井香織先生によるグラフィックレコーディング講座では、会議をブーストするグラレコの効果と使い方をテーマに、グラレコの基本から応用、職場での活用方法にまで展開させました。実際にグラレコを行い短期間でスキルを身につけました。

キャリアアップ講演



キャリアを実現するためのスキル

株式会社ヒューマンブレンディ代表の田寺尚子さんにキャリアを実現するためのスキルと心構えについてご講演いただきました。受講者とのディスカッションを交えながらキャリアを考える中で重要な思考やレジリエンス力の高め方についてお話いただきました。

キャリアアップ講演



東京都が取り組む女性活躍推進

東京都議会議員の福島りえこさんに、研究者として世界初の製品開発をした経験や、都議として女性活躍などの支援事業、都政の実績など、自身のキャリア構築に繋げてお話いただきました。受講者からは質問も多く白熱した講演会となりました。

ライフマネジメント講演



日常の当たり前に問題提起を

科学と人との関わりにコンセプトをおいた作品を制作されている現代美術家の長谷川愛さん。本講演会では、長谷川さんの作品を通して、独自の視点で見つめる未来、それから自身の作品制作に込めている思い、「これまでの固定観念を壊し、全く新しい選択肢を提示する」ことについてお話いただきました。

ライフマネジメント講演



ひとつひとつの成功体験の積み重ね。 外資系企業の管理職として自信をもてるまで。

外資系の医療機器企業に長年携わってきた経験を基に現在は医療機器に特化したインキュベーター支援を行う桜井公美さん。結婚や子育てといった女性ならではの経験を含む自身のキャリアから学んだ、妥協することなく自分の道を切り拓くこと、リーダーとして果たすべき役割についてお話いただきました。

ライフマネジメント講演



「好き」を仕事にする勇氣

産業資材に魅力を感じ、ロンドン滞在中に独学でアクセサリデザインを始めた坂雅子さん。挫折を経験しながらも進み続け、ご自身で立ち上げたブランド「acrylic」の商品は国内外で販売され多くの人に愛されています。アクセサリやバッグなど実際の商品とともに、発想の原点やビジネスの視点・人との繋がりについて、お話いただきました。

ライフマネジメント講演



企業で主体的に 生きていくということ

芙蓉総合リース株式会社に長年キャリアを積み、グループ会社である株式会社アクア・アートで代表取締役を務めた上野ゆかりさん。過去の失敗から学んだ、自ら選択・判断し、結果に責任を持つという意味での「主体的」、そして周りの力を借りながら仕事を全うする「しなやかさ」についてお話いただきました。

「共創デザイン学科」の 授業がスタート

2023年4月、芸術学部（杉並キャンパス）に新たに開設された「共創デザイン学科」。「共創型リーダー」の育成を目指すこの新学科で行われている、これまでにない教育内容を実際の授業の紹介とともにお伝えします。

「共創力」が重要な役割を果たす

私たちを取り巻く環境が急速に変化し、将来を予測することが困難なVUCA※の時代。既存の考え方や手法では解決できないSDGsなどの課題に対して、デザインやアートが持つクリエイティブな力への期待が高まっています。これからの時代が抱える課題を解決するには、個の力ではなく、多様な領域の人々と共に新しい価値を創り出す「共創力」が重要な役割を果たします。そして、多様な人々と共に構想し、成長しながら目標に導いていく「共創型リーダー」の育成が必要です。共創デザイン学科では、創造力の基礎となるデザイン教育を土台に、多様な領域の人々と共創するための「共創教育」、様々なライフイベントも乗り越える折れない心を育成する「ラ

イフマネジメント教育」を行い、これらを応用してビジネスの現場で活躍する力を身につける「産官学連携による実学」に取り組みます。これら3つの特徴的な教育により、学生一人ひとりに「共創型リーダーシップ」が養われると考えています。さらに、授業を担当する教員全員が、様々な分野の第一線で活躍する現役ビジネスマンやデザイナー、エンジニアといった実務家教員であり、今、正に社会で起きている課題を題材に実践的な学びを提供する、これまでの美大で行われてきた授業とは一線を画す教育を行っています。ここでは、「共創教育」「ライフマネジメント教育」「産官学連携による実学」それぞれについて、実際に行われている授業を紹介いたします。

※VUCA（ブーカ）：Volatility[変動性]、Uncertainty[不確実性]、Complexity[複雑性]、Ambiguity[曖昧性]という4つのキーワードの頭文字から取った言葉で、時代の経営環境や個人のキャリアを取り巻く状況が極めて予測困難な状況に直面しているという認識を表現する。

共創型リーダーシップ 共に新しい価値を作り出す力

産官学連携による実学



共創教育

ビジネス・テクノロジー・クリエイティブの
分野融合カリキュラム



ライフマネジメント教育

折れない心を創るマインドセット

デザイン教育

教養教育（一般・芸術）

折れない心と自身を高め続けることのできるマインドを養う 「ライフマネジメント教育」



人生には様々な困難が待ち受けています。誰しもぶつかる問題もあれば、女性ならではの問題もあります。そのような困難に、時には立ち向かい、時には巧かわす、そんな強かさとしなやかさを備えた自己成長力を身につける授業を揃えています。

ライフマネジメント論Ⅰ

将来、社会活動やライフイベントの中で多様な困難に直面した際、それ乗り越えるための強い自己の形成を目標にした授業。1年次は導入として「食」と「睡眠」にフォーカス。「食」では、社会で活躍するための心と身体の土台作りを目指し、「睡眠」では良質な睡眠のためのメソッドを身につけ、それらが心身にもたらすポジティブな影響を体験します。

チャレンジスプリント

1年次のカリキュラムの冒頭に実施する、これまでの既成概念を壊すことを目標とする授業。リサーチや講義といったインプットから、グループディスカッションを経て、プレゼンテーション等のアウトプットまでを繰り返し実践します。今年度は海外のビジネスの実例を通し、グローバル視点を持つことで日本の良いモノ・コトをどのように世界へ発信していくか、海外の新しい動きをどのように自分自身や日本に取り入れていくかを体感しながら視野を広げました。

自律的キャリア教育

共創デザイン学科が社会人女性の学び直しのサポートを目的に開催した「レジリエンスキャリアプログラム」(PI7.18)と連携し、プログラムの一部の講座を聴講。様々な経験を積みながら社会で自らのポジションを築いている女性実業家などの講演やインタビューなどを通して、女性がキャリアを築く上で必要な、失敗を恐れないマインドセットについて学ぶとともに、講座のレポート作成によって、語彙力や編集力を身につけます。

多様な領域の人々と共創するための 「共創教育」



ビジネス・テクノロジー・クリエイティブの分野融合カリキュラムによって、異なる専門領域や価値観を持つ人々との違いをプラスに変え、共に新しい価値を生み出す技術と精神を育成し、自ら創り出す力、周囲を巻き込む力を養う様々な授業を展開しています。

UXリサーチ

物事を考える時のものさしや手掛かりになる「リサーチ」の基本を学ぶ授業。ユーザーアンケートやインタビューを体験・考察して、PR計画や各自が設定したコンセプトに沿ったショップ販売の企画書を作成します。実店舗でのフィールド調査も行い、ものを作る側・使う側がどのような商品に魅力を感じるのか学びながら、物事の多面性を深く考える一連のプロセスを体験します。

プログラミング演習

UX、UIデザインとの関連性が深いプログラミングの基礎を学ぶ授業。学科オリジナルのロボットを動かしたり、アプリケーションを用いて実際に体験してみると、プログラミングの楽しさとともに、その概念と効果を実感します。また、コードを用いずにプログラミングの概念を学び、プログラミング思考を身につけることで、様々な分野の課題解決につなげる力を養います。

スマートデジタルクリエイション

iPadで自分のアイデアやデザインを、スピーディーに分かりやすく魅力的に他者に伝える技術を磨く授業。共創デザイン学科では入学時に全員にiPadが支給されます。Illustrator、Photoshopなどの基礎スキルに加え、ProcreateやCanvaをはじめとする様々なアプリケーションを他者とのコミュニケーションツールとして活用する手法を身につけます。

プロジェクトデザイン

プロジェクトの形成や牽引などのワークを通し、社会にモノ・コトを実装、浸透させていくための「問いを立てる力」「分析する力」「観察する力」「共感する力」「決断する力」を身につけ、ビジネスの基本フレームを学ぶと共に、未来のビジネスを創っていくマインドを培う授業。グループワークで課題に取り組むことで、チームの中で生まれる多様なポジションの重要性を体感します。

ビジネスの現場で生きる力を養う「産官学連携による実学」



これまで紹介した授業で得た学びを、課題解決型の産官学連携プロジェクトで即座に実践していきます。自身の興味に合わせて参加する各プロジェクトは、入学直後の4月からスタートし、1年間を通じて行われます。通常3年次から行うことが多い産官学連携ですが、1年次から経験を積むことで、実践力はもちろん、社会人としてのマナーや重要な場面で物怖じしない度胸を身につけることができます。また、意欲のある学生は複数のプロジェクトを同時並行で取り組み、自らの能力を高めています。（産官学連携事例：パンドダイナムコアミュージメント、真多呂人形、障害者支援施設、妙高市のNPO法人など多数）

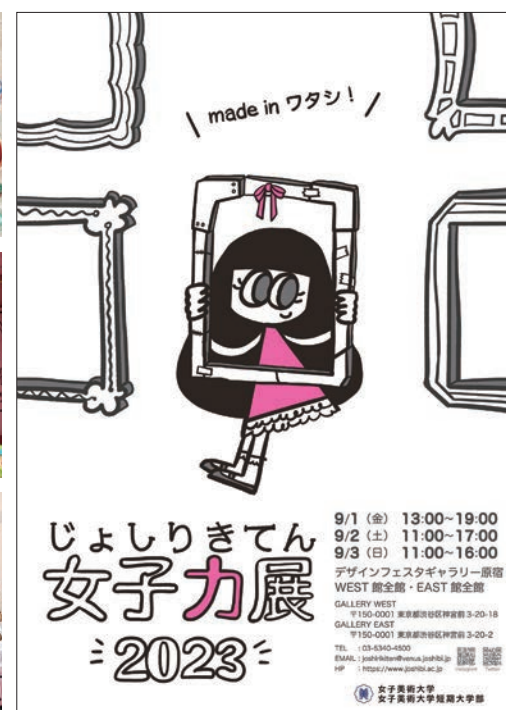
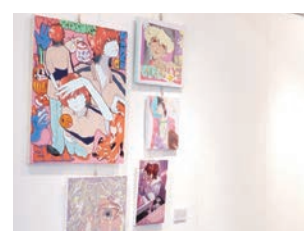
今回ご紹介した授業は主に前期に行われた授業であり、後期には、これからの時代に不可欠なデザイン経営について学ぶ「ビジネスデザイン概論」や、直感的に人の気持ちに作用する色・素材・加工のデザイン領域を取り扱う「CMFデザイン」、多様性を受け入れる力を養う「インクルーシブデザイン論」など、様々な授業が行われています。2年次以降

の授業では、より高度な授業内容となっていく、コンセプトや仕組みなど「目に見えない」部分のデザインをはじめ、サービス、ビジネス、ブランド、マーケティングなど、各専門領域についての授業を展開していく予定です。その間も実践の場としての産官学連携プロジェクトは絶え間なく実施し、時代に求められる共創型リーダーを養成していきます。



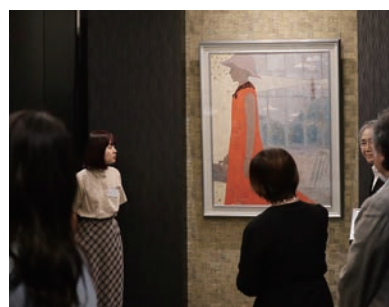
芸術家を目指す美大生の夢の実現をサポートする 「芙蓉・女子美Venusファンド」授与式を開催

本学と芙蓉総合リース株式会社は、2021年から共同で行う「芙蓉・女子美Venusファンド」の授与式を2023年9月1日に開催いたしました。
 「芙蓉・女子美Venusファンド」は、本学の学生が芸術家として社会に羽ばたくためのサポートを行うとともに、新たなアートを社会へ還元することを目的に2021年に設立いたしました。芙蓉総合リース株式会社は、多くの企業とのリレーションを活かし、作品を展示する「場の提供」に取り組み、女子美術大学はその場に合う、学生が作成した作品の監修・選定を行います。
 2023年3月に芙蓉総合リース株式会社が入居する住友不動産麹町ガーデンタワーにて、本ファンド初の作品展示を開始し、現在では計4カ所に、多くの推薦作品の中から選ばれた9作品が展示されています。この取り組みは今後も継続し、さらに展示場所を拡大していく予定です。
 授与式に出席した本学の松本博子副学長は「プロジェクトによって、女性作家と社会のギャップが埋まり、女性の豊かな感性や力強さを多くの方々に知って頂きたいと思います」と話されました。現段階までに受賞した学生には賞金と賞状が贈られ、作品設置の喜びと感謝、今後の抱負などが述べられました。



「じょしりき【女子力】展」2023

9月1日から3日までの3日間、「じょしりき【女子力】展」がデザインフェスタギャラリー原宿にて行われました。
 じょしりき【女子力】展とは、女子美生が持つ「群れない・違いを認め合う・自由な・力強い・流行に流されない」をテーマに、杉並キャンパスと相模原キャンパスの両校地の学生が原宿のデザインフェスタギャラリーに集まり、それぞれの思いを込めた作品を披露することができたイベントです。
 「好き」な気持ちをもっと「好き」に、「好き」を確固たる自身の「力（自信）」に、そのような思いから6度目の開催へと至った今年は、久しぶりの学生による在廊のもと、およそ200団体の女子美生が参加し、油絵や日本画の絵画作品の展示やオークション販売から、ガラスや陶芸の工芸作品の販売、オリジナルのイラストやデザインを施したグッズの販売など、学生による個性豊かな作品が原宿の会場を埋め尽くしました。
 女子美生たちの思いが一同に会した「女子美ワールド」で、多くの来場者の魅了した3日間となりました。

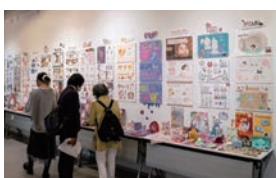


受賞作品の画像および展示場所はこちらよりご覧いただけます。
<https://www.fgl.co.jp/sustainability/society/community/venusfund/>

女子美祭2023

10月20日～22日の3日間、杉並・相模原両キャンパスにて『女子美祭2023』が開催されました。今年は4年ぶりに事前予約なしの対面にて実施。杉並キャンパスは「宇宙旅行」、相模原キャンパスは「夢中毒」をテーマに在学生の作品展示、自主展示、ステージ発表、有志によるハンドメイドのグッズ販売を行いました。また、卒業生が手掛けたキャラクターが多く描かれているサンリオカフェワゴンにてスウィーツやグッズを販売。本学卒業生が手掛けたキャラクターはなまるおばけも杉並キャンパスに遊びにきてくれました。ゲスト講演会では杉並キャンパスでは声優の古川慎さんが来校。相模原キャンパスではアインシュタインさん、素敵じやないかさんによるお笑いライブ、声優の置鮎龍太郎さん、新井良平さんによるトークショーが開催され、好評を博しました。学生のみならず、多くの来場者が訪れ、キャンパスが賑わいを見せました。

ポスターデザイン 杉並キャンパス：田崎裕夢／相模原キャンパス：杉本花



客員教授 奥村鞆正氏・澁谷克彦氏 特別講義開催

10月21日に相模原キャンパスにて芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻客員教授の奥村鞆正先生と澁谷克彦先生による特別講義が開催されました。本講義に参加する学生はテーマに沿った課題を制作し、奥村先生と澁谷先生から講評いただきました。今年のテーマは「MULTIVERSE」。会場にはポスター、映像、立体作品など様々な作品が集結しました。自身の寝癖を毎日撮影し、計200枚以上のセルフポートレートをプリント作品、映像作品など様々な媒体に展開した佐藤時さんの作

品が、奥村鞆正賞を受賞。また、身体の一部をグラフィックデザインに落とし込み、大胆な構成でポスター作品に仕上げた井橋杏樹さんの作品が、澁谷克彦賞を受賞。合わせて斬新なタッチのグラフィックをポスターに出力した青柳芽育さんと、藁半紙にスプレーを吹きかけて紙面を構成した大橋結さんの作品が入選しました。参加した学生は、伝えるために様々な表現に挑戦し、奥村先生と澁谷先生から直接講評していただくことで、今後の制作にも繋がる経験を得られました。



客員教授 假屋崎省吾先生 特別講義開催

本学短期大学部客員教授であり華道家の假屋崎省吾先生による特別講義が、5月26日に杉並キャンパスにて開催されました。まず初めにいけばなのパフォーマンスが行われ、シャープな印象の花器を使用し、花材には白い百合の花を使い、存在感と迫力のある作品を完成させました。その後スライドを使用した説明では假屋崎先生の幼少期からアーティストとして活躍する現在までの道のりについてお話しいただいたほか、これまでに制作された作品の紹介として、いけばなの作品や企画展、個展やシヨールームのシヨップデザインなどを、当時の写真とともに幅広くご紹介いただきました。最後の質疑応答の時間では、学生からの質問が多く寄せられ、学生の近くまで行き笑顔で答える姿がとても印象的でした。在学生や教員、多くの聴講者が集まり最後は大きな拍手とともに特別講義は幕を下ろしました。



佐野ぬい先生お別れの会が開催されました

本学卒業生で洋画家、本学名誉教授、元学長の佐野ぬい先生が、8月23日90歳で逝去されました。佐野先生は1955年芸術学部洋画科を卒業。その後、助手、専任講師、助教授、教授として後進の指導にあたられ、2007年から2011年には、第16代女子美術大学学長を務められました。洋画家としても、長年に渡り作品を多数発表し、1986年と2011年には紺綬褒章を、2012年には瑞宝中綬章を受賞。その青色を基調とする作品から「青の画家」と称されました。

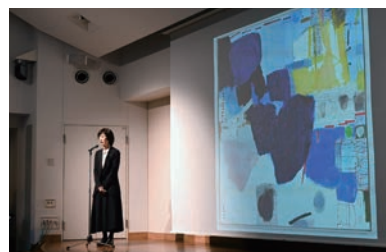
そんな素晴らしい功績、人柄の佐野ぬい先生を、生前親交のあった方々と語り合いたい、小倉文子学長、山口裕子同窓会会長、福士朋子洋画専攻研究室主任が発起人となり、「佐野ぬい先生お別れの会」が10月7日に杉並キャンパスにて執り行われました。佐野先生と所縁のある福下雄二理事長をはじめ、大村智名誉理事長、入江観名誉教授、一居孝明新制作協会絵画部委員長、佐藤泰生新制作協会絵画部会員、山口同窓会会長、佐藤和子



佐野ぬい先生の絵をモチーフに山本耀司元客員教授が製品化した洋服



女子美110周年記念の展覧会のオープニングパーティーで披露された衣装3点



150号の遺作「セルリアンブルーの街」



葦崎大村美術館 展覧会レポート



葦崎大村美術館は、本学の名誉理事長でもおられる葦崎市出身の大村智博士が長年に渡って蒐集してきたコレクションをもとに2007年に開館されました。大村博士は、「優れた美術品は個人で楽しむものでなく、人類全ての共有財産である」との思いから建設に至り、翌2008年、故郷のさらなる芸術・文化振興のために活用されることを目的として美術館を葦崎市に寄贈されました。また同年には、葦崎大村美術館と本学において美術品等の相互協力協定を締結。そして2014年には、葦崎市とも連携協働に関する協定を締結し、葦崎大村美術館と葦崎市と本学はこの協定のもと、教育・文化の振興、発展、人材育成、まちづくり、産業振興等の推進・発展に貢献しています。

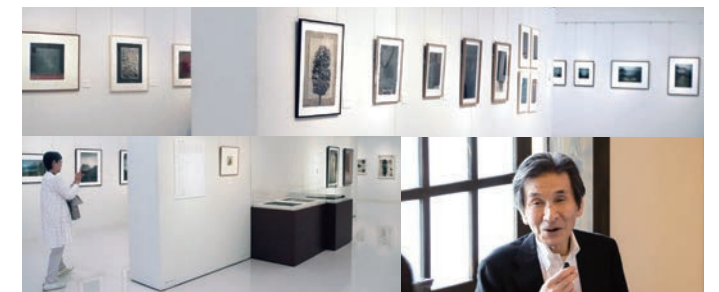


「版画＋（プラス）馬場章 銅版画展」

6月～8月にかけて本学名誉教授である馬場章先生の「版画＋（プラス）馬場章 銅版画展」が開催されました。6月11日には、大村先生の生家かつ国の登録有形文化財でもある「螢雪寮」にて、馬場先生によるトークイベントも実施されました。トークイベントでは、幼少期から今日までの活動を、当時馬場先生に大きな影響を与えてきた恩師の方々を挙げながら振り返るほか、美術館にて展示をされていた『Planetariumシリーズ』やフォトグラヴェールを用いた『A corner of the gardenシリーズ』、ピンホールカメラより着想を得た『Twilight Fieldシリーズ』など馬場先生の実験的な手法を多くの作品と共に紹介されました。トークイベント終盤、自身の制作活動を振り返って「やはり自分は大学に勤めていたのが非常に大きかった」と馬場先生は語ります。「他人の書いた本でいくら講釈をしても上手く教えることはできない。まずは自分で、そして学生と一緒に実験をして上手いことを教える。大学にいたお陰でたくさんを経験することができました」多くの聴講者が参加をした今回のトークイベント、温かな拍手と共に幕を閉じました。

生誕120年 森田元子展 彩・線・形

9月～11月にかけて、本学卒業生で昭和の洋画壇で活躍した森田元子先生（1903-1969）の生誕120年を記念した「生誕120年 森田元子展 彩・線・形」が開催され、学芸員によるギャラリートークも行われました。本展覧会では美術館に所蔵されている美術館所蔵の全52点の中から精選した24点の作品に加えて、森田先生に所縁のある日用品も展示。ギャラリートークでは、初期から晩年の作品を当時の様子を振り返りながら、独創的な変遷を見せた森田先生の作品の魅力に迫りました。



女子美術大学 × がん研究会 有明病院 ブランディングプロジェクト

本学芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域と、公益財団法人がん研究会 有明病院が協働し、本学学生作品を病院内ロビーに展示する「元気になる展覧会Vol.3」が開催されました。本展は、入院・通院されている患者さんやそのご家族、医療スタッフの方々に元気づけるとともに、病院のブランディング確立を図ることを目的に、がん研究会 有明病院が主催する展覧会としてこれまでに2回開催。今回、第3弾として本学芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域の学生が授業内課題として制作したイラストレーションの作品18点が展示されました。



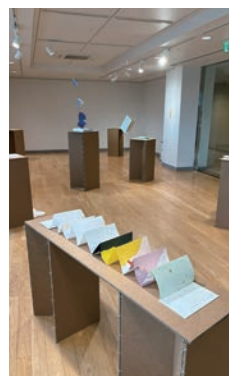
祝嶺恭子（しゅくみね・きょうこ）

1937年那覇市出身。62年女子美術大学芸術学部美術学科工芸科卒業。62年首里高等学校勤務。76年那覇伝統織物事業協同組合設立、専務理事に就任。77年第1回伝統的工芸品展で内閣総理大臣賞受賞。86年沖縄県立芸術大学勤務。92年文部省在外研究員としてドイツ海外研修。2003年祝嶺染織研究所開設。04年第24回伝統文化ポーラ賞受賞。16年女子美術大学平成28年度「100周年記念大村文子基金」大村特別賞受賞。沖展会員、国展会員。

本学卒業生の祝嶺恭子さんが 人間国宝に認定

本学卒業生である祝嶺恭子さんが国指定重要無形文化財「首里の織物」保持者（人間国宝）として認定されました。祝嶺さんは、本学工芸科で柳悦孝先生に師事し沖縄の染織を含む幅広い染色技法を学びました。また、国内外に保存された琉球の染織品の調査・研究に取り組むなど織物の研究も重ねてきました。伝統的な首里の織物を制作する卓越した技だけでなく、ドイツの博物館に所蔵されている琉球王国時代の染織物の調査を精力的に行い、その成果を自身の創作へと発展的に展開させ、後進の指導・育成にも尽力していることが高く評価されました。

NEWS — & — TOPICS



本学卒業生が第15回紙のアートフェスティバル2023にて大賞を受賞

紙の生産地として全国的に知られている静岡県富士市では、その紙を文化・芸術の分野でも活用していくために「紙のアート」作品を全国から公募し、受賞作品による展示会「紙のアートフェスティバル」を開催しています。今回、本学芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域卒業生の鈴木優里香さんが「第15回紙のアートフェスティバル2023」にて大賞を受賞し、ふじ・紙のアートミュージアムにて、「鈴木優里香展 My Skin, My Blood」が開催されました。10月15日には、

鈴木さんによるアーティストトークが行われ、本学在学時の「癒し」をテーマにした作品制作経験が現在も役立っており、特にヒーリング表現領域2年次の手製本の授業が、紙を使った作品を作るきっかけになったとお話されていました。会場には様々な工夫を凝らした10冊の本が展示され、アーティストトークには40名以上の来場者が集まり、熱気のあるイベントとなりました。

アルゼンチンワイン ラベルデザインコンテスト

9月7日、日本とアルゼンチンの外交樹立125周年を記念したワインラベルのデザインコンテストが、株式会社トゥエンティワンコミュニティ主催のもと、駐日アルゼンチン共和国大使館にて行われました。“No Border”をテーマに本学在学学生・卒業生44名75作品の応募があり最終選考に残った5名が作品とともに会場に集結。それぞれの学生による思いのこもったプレゼンテーションで会場を魅了しました。審査員には、ワイン漫画「神の雫」原作者、樹林伸氏と樹林ゆう子氏、社会派漫画「島耕作」シリーズの作者、弘兼憲史氏らをお迎えし受賞作品を決定。最優秀賞には鶴原百花さんの『大地』が選ばれ、「このような素晴らしい賞を頂けて大変嬉しく思います」と喜びを語りました。鶴原さんがデザインしたラベルのアルゼンチンワインは、日本とアルゼンチンにて数量限定で販売予定です。どうぞご期待ください。



↑コンテスト詳細はこちら
<https://www.21cc.co.jp/arjp125/>

最優秀賞
鶴原百花さん『大地』
芸術学部 アート・デザイン表現学科
メディア表現領域 1年





07 | NEW ENERGYに『丹後×女子美JiUNi』が出展

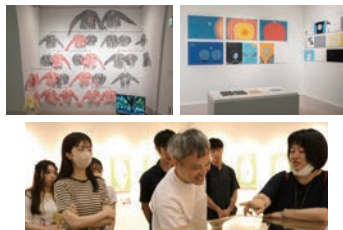
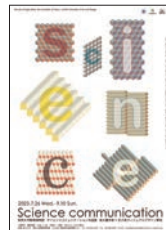
2023年9月7日(木)～9月10日(日)、展示会、マーケット、メディアを内包したクリエイションの祭典「NEW ENERGY」が新宿住友ビル三角広場に開催され、本学短期大学部から『丹後×女子美JiUNi』が出展しました。『JiUNi』とは、短期大学部専攻科テキスタイルの学生が提示する、丹後ちりめんを次世代へと繋ぐアップサイクルブランドのことで、京都府京丹後市で作られた、300年以上の歴史を持つ丹後ちりめんの生産過程で出る端材や不良在庫を活用し、未来の架け橋と

して役立てるようにと思いを込めた作品が並びました。今回のテーマは「NEO KOMANEKO」。京丹後市の金刀比羅神社に祀られている養蚕の神「狛猫」をモチーフに、16種類のキャラクターによるこま猫のマスコットストラップを制作しました。また他にも、ちりめんで作られたシールを自由に貼り付けられるようにブースの左右に2体の狛猫を設置し、神社を意識した来場者も楽しめるブースとなっていました。



09 | 絵本のまちコラボレーション授業

東京都板橋区と本学芸術学部アート・デザイン表現学科が「絵本のまち コラボレーション授業」を行いました。「絵本のまち板橋」とは、絵本を通じた文化振興、産業振興、観光振興また教育活動などであり、それらを分野横断的につなぐ板橋区の取り組みです。社会とアートの関係を学ぶアート・デザイン表現学科の授業の一環で、3年生10名が板橋区内の図書館や印刷会社を訪れるなどして考察した「絵本のまち」を活性化する案を板橋区の職員に提案しました。学生たちの提案は今年の10月に開催される板橋区民まつりにて展示されました。



08 | サイエンスコミュニケーション作品展 東大 農学部 × 女子美 ヴィジュアルデザイン専攻

東京大学農学部と本学デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻とのコラボレーション授業の成果を展示した「サイエンスコミュニケーション作品展」が東大駒場博物館にて開催。過去6年間の授業の中からセレクトされた作品が並びました。【本学担当教員より】美術大学のデザインの授業では、模擬的な課題が多く行われています。その場合クライアントは不在で自由度も高く、仮にデザインを失敗したところで誰の迷惑にもなりません。サイエンスコミュニケーションの授業では、東大生がクライアントとして実在し、その研究の魅力を高校生などの若い世代に伝えるという大切な役割を担っています。科学という分野の違う世界、その研究に接し、丁寧な説明を受けながら、ディスカッションを重ねデザイン制作を進めていきます。知らないことへの興味と熱い研究者の思いを受け、通常の授業とは違う緊張感を感じながらの制作となります。リアルな体験がお互いの学生にとっても視野を広げる有意義な授業となっていることでしょう。担当教員：後藤康之(東京大学 農学部 教授)、工藤光子(東京大学 農学部 特任准教授)、鈴木安一郎(女子美術大学、東京大学非常勤講師)



06 | SPEED FLAT in 江の島国際芸術祭

未来のもののづくりのあり方を考えるプロジェクト「SPEED FLAT」。2016年より行っている本プロジェクトは、社会実装を目指しプロジェクトを実践するためのフィールドとして、江の島国際芸術祭に参加しました。本学からは、芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻在学生の有志20名が参加。「江の島」をテーマに、江の島商店街内の店舗にて配布するコースターとパンナーを制作しました。また、本プロジェクトのメインヴィジュアルを本学客員教授の澁谷克彦先生が手がけられています。(指導教員：粟辻美早教授・澁谷克彦教授・林規章教授・松山智一教授)

05 |

Maker Faire Tokyo 2023に本学から2ブースが出展

誰でも使えるようになった新しいテクノロジー(センサー、3Dプリンター、ロボット、AI、VRなど)をユニークな発想で使いこなし、皆があつと驚くようなものや、これまでになかった便利なものを作り出す「メイカー」が集い、展示とデモンストレーションを行うイベントMaker Faire(メイカーフェア)に、今年も本学から「ロボット研究プロジェクト」と「ファッションテキスタイル表現領域」が出展しました。ロボット研究プロジェクトは、「近くに置いておきたいパートナーロボット」をテーマに学生作品を展示。美大生の自由でユニークな発想やこだわりが際立つ作品が並びました。ファッションテキスタイル表現領域は、「電子クラフト」を受講した有志学生たちによる電子工作を用いたファッションアクセサリとオブジェを展示。「わたしのときめきアイテム」と題した、使う人の心を楽しくさせるような光るアクセサリが展示され、両ブースを訪れた多くの来場者は実際に触れて体感していました。

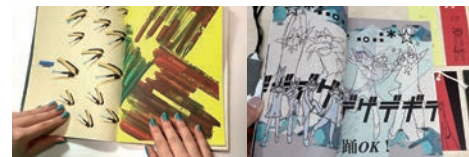


日沼禎子教授の 刊行記念交流会が行われました

本学アートプロデュース表現領域教授でJOSHIBI AIRのディレクターの日沼禎子先生が、AIR研究の第一人者である菅野幸子さんと共同編集・執筆された書籍『アーティスト・イン・レジデンス：まち・人・アートをつなぐポテンシャル』の刊行記念交流会がオランダ王国大使館 大使公邸で開催されました。イベントには、都内近郊のAIRのご担当者の方々、アート事業を運営されているの方々、各国大使館の文化担当の方々など、たくさんの方が会場にいらっしやり、AIRの話題を中心に熱気ある交流会が行われました。この書籍の刊行をきっかけに、今後ますますAIRへの関心や議論が、広がりと深まりを見せることが期待されます。



『アーティスト・イン・レジデンス：まち・人・アートをつなぐポテンシャル』
刊行：美学出版 編者：菅野幸子、日沼禎子



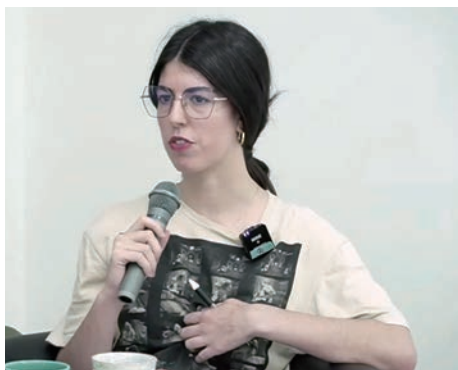
女子美術大学 × 名古屋造形大学 交流展示『ZINE展』

本学相模原キャンパスのSWITCH Laboにて、女子美術大学と名古屋造形大学との交流展示が行なわれました。タイトルにある「ZINE」とは、個人で作る小冊子のことです。「magazine」が語源で、「自分の好きな対象について好きなように書く」ことから「fan zine」と呼ばれていたものが「zine」になったと言われています。本学洋画専攻絵画コースでは、2020年度からzine制作の授業を開講しています。名古屋造形大学 映像文学領域 准教授の原游先生が、本学 洋画専攻 教授の福士朋子先生からこの授業について聞いたことをきっかけに、名古屋造形

大学でもzineを制作する「紙と絵と言葉」が開講されました。今回、原游先生のご提案により、両大学にてzineの交流展が開催されることとなりました。名古屋造形大学へ本学洋画専攻絵画コース3年生が制作したzineを送り、「紙と絵と言葉」受講生の成果展・本学との交流展示となる「ZINE TEN」が8月23日～9月2日に開催されました。本学では、9月14日～22日の期間、洋画専攻から今年の受講生24名と、昨年の受講生の新作zine、名古屋造形大学から選抜された10点のzineを展示しました。

JOSHIBI AIR (女子美アーティスト・イン・レジデンス)

7月27日にJOSHIBI AIRに滞在したアラズネ・ズビザレッタさんとKoganecho AIRに滞在したマル・デ・ディオスさんによるアーティストトークが、本学アートプロデュース表現領域3年生主催のもと行われました。トークイベントでは、銅版画で制作をしているアラズネさんとアートとデザインの両方の観点からセラミック作品を展開するマルさんのお二人に、作品制作の背景や自分の中で大切にしていることなどを深掘り。後半では、作家活動と社会で仕事をするものの関係性や、海外で滞在制作することの刺激についてそれぞれの思いなど、就職活動を控えた3年生や国際的な活躍を目指す本領域の学生にとって貴重な意見をいただきました。8月末には本AIR活動の集大成でもあるオープンスタジオも行われ、女子美滞在中に制作をした多くの作品がスタジオに集まりました。国際的に活動をするアーティストが今回の日本での経験に刺激を受けたように、学生にとっても大きな刺激となりました。



大田区の町工場 × 女子美術大学 町工場キャラクター・コンテンツ創出 プロジェクト発表会

10月24日、大田区で起業を支援する施設「六郷BASE」にて『大田区の町工場×女子美術大学 町工場キャラクター・コンテンツ創出プロジェクト発表会』が行われました。本プロジェクトはアート・デザイン表現学科メディア表現領域、ヒーリング表現領域3年生によるプロジェクト&コラボレーション演習で行われ、実際に大田区の町工場に足を運び、リサーチを行いながら6週間に渡って実施されました。日本の産業を支える町工場で生産される様々な部品にスポットを当て、普段あまり注目されない部品たちの役割や重要性などを魅力的に伝えるコンテンツ制作を行いました。当日は、学生がキャラクターやグッズ、まんが、アニメーション、ゲーム企画などに展開した作品についてプレゼンテーションを行い、その後の交流会では町工場の方々に実際に手に取って貰いながら意見を交え、「今まで自分たちの部品をこういう視点で見た事がなかった」「今からすぐにでも使いたい」などたくさんの意見を頂きました。普段あまり関わることのない分野とのコラボレーションによって新しい発見や学びが多く、今後の展開が楽しみなプロジェクトとなりました。

JAM

女子美術大学美術館コレクション展
蒐める／表すー溝田コトエコレクション

2023.5.24(水)ー7.29(土)

本学名誉教授の溝田コトエが収集し、当館に寄贈した近現代の
絵画・版画・彫刻などを紹介する展覧会を開催しました。

第43回 造形「さがみ風っ子展」

2023.10.20(金)ー10.22(日)

相模原市内小中学生の造形作品展を開催しました。

女子美ガレリアニケ

ニケキュレーターズセレクション#07

奥村巴菜展ー虫めづる視点ー

2023.5.12(金)ー6.15(木)

本学卒業の若手アーティストを紹介する展示。本年は、陶芸家
として活躍する奥村巴菜の作品を紹介しました。

女子美スピリッツ2023 松崎笙子のデザイン

2023.10.5(木)ー10.24(火)

本学名誉教授の松崎笙子による既成観念に囚われない遊び心のあ
る浴衣・手ぬぐいなどのデザインを紹介する展覧会を開催しました。

歴史資料展示室

女子美術大学所蔵 藤田文蔵作品展

2023.4.5(水)ー7.15(土)

女子美の創立者の一人、初代校長で彫刻家の藤田文蔵作品等を展示公開し、その
生涯と功績を紹介しました。

女子美染織コレクション展PartⅡ アンデスの染織品

前期展示 2023.9.13(水)ー10.7(土) 後期展示 11.1(水)ー12.9(土)

女子美染織コレクションが有する高度な織物技術により創出され
た色彩豊かでユニークなデザインのアンデスの染織品を、前期・後
期に分けて紹介する展覧会を開催しました。女子美術大学美術館コレクション公開 *造形「さがみ風っ子展」
同時開催

2023.10.20(金)ー10.22(日)

特別展示室でJAM所蔵の佐野ぬい作品と、女子美染織コレクション
からアンデスの染織品を特別公開しました。

女子美術大学短期大学部1年前期「基礎造形2023」展

2023.7.12(水)ー7.27(木)

短期大学部1年生が自由選択授業で制作した学生作品を展示しま
した。

遠山香苗展 音手紙⇄絵手紙

2023.10.30(月)ー11.17(金)

本学付属高等学校・中学校の美術科教諭の退職を記念して展覧会
を開催しました。

JAM

2023年度 女子美術大学退職教員記念展

2024.1.10(水)ー1.27(土)

2023年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

2023年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2024.3.9(土)ー3.16(土) *3月10日(日)は特別開廊 *3月13日(水)、14日(木)休廊 2023年度に大学院博士前期課程を修了する学生の作品を展示します。

女子美ガレリアニケ

2023年度 女子美術大学退職教員記念展

2023.12.1(金)ー12.20(水)

2023年度本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

2023年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2024.3.9(土)ー3.16(土) *3月10日(日)は特別開廊 *3月13日(水)、14日(木)休廊 2023年度に大学院博士前期課程を修了する学生の作品を展示します。

歴史資料展示室

2023年度 新収蔵資料展

2023.9.13(水)ー2024.3.15(金) *休室日 火・日・祝日、年末年始(12月26日～1月9日)

相模原校舎定点写真や付属幼稚園関係資料など、2022年度の新収蔵資料を中心に歴史資料を展示公開します。

JAM 女子美アートミュージアム展覧会情報

女子美術大学コレクション
蒐める／表す
溝田コトエコレクション

2023.5.24(水)ー7.29(土)

本学名誉教授で画家の溝田コトエは、1960年代
からおよそ半世紀かけて蒐集したコレクションから
「学生の学びのために」と選りすぐった国内外54
作家135件の作品を、2006年および2011年に当館
に寄贈しました。2011年、2015年に続く3回目の
コレクション紹介となる本展では、近年の作品調
査の成果を反映し、さらに所蔵作品から関連作家
や溝田自身の作品も加えて、コレクションの全貌を
提示しました。溝田にとっての同時代美術の集成
にとどまらない戦後美術の展開と多様さを見渡す
ことができる作品群、特に立体作品の量と質の高
さが注目されました。



撮影：木奥恵三

女子美染織コレクション展
PartⅡ アンデスの染織品

前期： 2023.9.13(水)ー10.7(土)

後期： 2023.11.1(水)ー12.9(土)

本展は、女子美染織コレクションが有する約400点の
アンデスの染織品を初めて紹介する展覧会となりまし
た。会場では、アンデス山脈の広さとアンデス文明が
発展した地域について重奏的に展開する試みを実施す
べく、多くの学内協力をいただきました。環境デザイン
専攻の卒業生に地図を作成いただき、会場の床面に
6mのサイズで設置。この地図をもとに動画を制作した
ことで臨場感が生まれました。また、プロダクトデザイ

ン専攻協力のもと標高差を一目で確認できる模型を作
成。来館者から「アンデス文明の地域と日本との位置
関係、その広さを知ることができ良かった」とお声をい
ただけました。2023年は、日本とペルーとの外交関係
樹立150周年であり、その節目の年に本学所蔵のアンデ
スの染織品を公開することで、単に染織品という枠を
大きく超えて、広範囲の方々に関心を持っていただき、
本学の多角的な表現力を開示する機会となりました。



女子美術大学広報誌

発行 学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 総務企画部広報グループ
監修担当 佐藤真澄・松山智一
デザイン協力 株式会社 Kitchen Sink.
印刷 株式会社ヒーローズ
発行日 2024年1月15日
© 2024 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ | TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL <https://www.joshibi.ac.jp>